

戦後、怪我と医療のこと

松本壽泰（当時、加西市在住 3歳頃の話）

昭和30年頃というと、私は小学校に入る前、物心もつかず、記憶もあまり鮮明でないのですが、家の中あちこち歩き回って親を煩わせていたようです。ある時、ヤカンをけとぼして両股、ふくらはぎに大火傷を負い、夜分でしたが、父が自転車に乗せて1km程近所の「カイさん」の家に担ぎ込んでくれたことがあります。カイさんはお医者さんではありませんが、水で冷やし応急処置をしてくれました。とりあえず包帯巻きで家に帰ると、一緒に住んでいた叔父が、カイさんの指示で大量の肉を買ってきてくれて、患部に貼り付け、包帯を巻き替えました。熱さましということだったので、翌日からは、とろろ芋をすって、包帯に塗り付け巻きました。それで数日して何とか火傷は収まったのですが、アザは今も両股に残っています。今から考えると、肉（何の肉だったのでしょうか、馬肉？）もとろろ芋の処置もいわゆる民間療法だったのでしょう。当時はわが町には病院も救急車もなく、カイさんのような人がいたので、助かったのだと思います。カイさんにはその後何年かして、骨折したときにもお世話になりました。ですから我が家では何かあると、カイさんに頼れば大丈夫という言い伝えがありました。医療制度が整備され、昭和40年代位には、カイさんとの縁も遠くなりました。小学校に入って、野口英世の伝記を読むと、博士が小さいころ大やけどを負ったという記述を読んで、身につまされたのを覚えています。